第二詩集

『青ざめた鳥たち』

向 殿　充 浩

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

目次

預言者たちの声	1988.1.12
無題（どこにいるのか？）	1986.7.31
砕けた車輪	1987.7.11
形のための儀式	1985.8.10
宇宙の風	1987.12.19
無題（一切の混乱を）	1987.9.8
野の廃墟で（モヘンジョ＝ダロにて）	1986.12.27
ぼくは狂気の中に生まれた	1988.2.29
突破しきれないなにか	1987.12.5
ガンガーのほとりで	1987.1.24
途方もない風の中に	1988.4.24（最新改訂：2015 年 7 月）
無題（ぼくが世界を傷つけたのか？）	1987.9.7
死者を弔う	1989.10.29
秋	1987.9.17
道なき道を歩き	1990.8.2
無題 （墓石の上で踊る）	1987.10.14
翼のない天使は・Ⅱ	1982.8.20（最新改訂 2019.3.27）
誰かがぼくの扉を叩いている	1988.2.21
さざ波のように音が	1988.1.14
夢を見ているトキの砂漠	1988.1.16
神々の山	1988.1.16
はるけさの中の冷たい光	1988.1.16
混乱の中の光る標的	1988.1.16
天使に	1983.8.3（最新改訂：2022.10.22）
けれどぼくなんて	1987.12.5
神々の死に絶えた海	1988.2.11（最新改訂：2016.6.28）
世界がぼくに用意してくれたものは	1987.11.23
神にではない	1985.11.13

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

無題（過激な夜の海に降りてゆこう）	1988.2.28
はるけさの中の石の標的	1987.11.23
トキの向こうへ	1988.1.14
たった一人の反乱	1992.3.30
ぼくの領土	1988.1.21
反抗	1988.3.6
青ざめた鳥たち	1990.9.22
ぼくの願いは人間でなくなること	1987.12.7
無題（哀れにも死んでいった芸術家たち）	1985.9.22
縹渺たる風の中で	1988.3.18
喪の領域に・Ⅱ	1988.11.21

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

預言者たちの声

ぼくは歩き続けた。
狭い舞台の上を
預言者たちの荒野を
天使たちのいなくなった道を
象形文字の判別できなくなった石碑のそばを
野ざらしにされた煉瓦の上を
石でできた川を
声で埋もれた空を
そしてあなたの手の上を
歩き続けた。

それからぼくは読んだ。
宇宙の墳墓に刻まれた記号を
紙の上に結晶させられた時間を
空の涯てで朽ち果てた瞑想を
砕けた風を
ぼくは読んだ。

巨大な闇との戦い、
扉をたたく者たちとの戦い、
青白い燈明の下での戦い、
神との戦い。
誰でもない者たちのつぶやきを
砂の上に刻み込むだけの試み。

1988.1.12

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

無題

どこにいるのか？
世界を描いた絶対者は
このキャンバスのどこにいるのか？
ぼくらにできることは
ただ記号を並べることだけ、
そして石を積み重ねることだけ。

遊星の上の小さな虫たちが
希薄な時間を眠っている。

1986.7.31

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

砕けた車輪

砕けた車輪、
道端の笑いを失った仏頭、
ぼくが今日キャンバスに描き込めるのは
どんな歌でも、
どんな物語でもない。
小さな小さなぼくだけのつぶやき、
意味を読み取れない風化した文字たち、
そんなものたちだけだ。

かつて明日という日のための
儀式を行う賢者がいたが、
けれど、ぼくの遊星では
明日もひゅうひゅうと風が舞い、
黒い大気が重々しく道をふさいでいるだろう。
石たちが顔を歪める荒野では
ブッダの声も宇宙の轟音にかき消されているからだ。

時間がひび割れている。

1987.7.11

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

形のための儀式

死者たちによって葬られた雪の区域、
ぼくが今日腕の中に抱いているのは
拡散してゆくばかりの気、
そして動きを失ってしまった青。

新たに生まれ出てくる記号たちは
けれど、巨大な業を引きずっている。
荒れ騒ぐ時間の車輪の下で
とめどもなく混乱を引き起こす
ちっぽけな存在者たち。

でも、そのことはもういい。
空の青と、
平和の鐘と、
散逸してゆくものたちのための儀式。
誰かが時間の斜面を踏むと
干からびた図形が滑り落ちてゆく。
誰かが風の中に石を投げ入れると
ざわめく文字たちが次々に砂と化してゆく。

もう終わりにするのだ！
そしてもう壊れてしまっていいのだ！
こんな何も生み出しはしない
ただ明日という日のためだけの儀式は。

1985.8.10

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

宇宙の風

真っ黒な空間に赤や黄色の色彩の飛沫、
緩やかな、あるいは急峻な曲線、
縺れ合い、絡み合う光の帯、
純粋で透明な音の列、
そして、きらめくような水の音、石の音、木琴の音、. . .

ぼくは不可思議な空間の入り口で行きつ戻りつしている。
そして宇宙の風を感じる。

モノが緩やかに動き、
トキが幾つかの断点で凝固している。
発光の向こうから流れて来る
世界の奥義を語る声、
そしてダルマの由来を語る声、. . .

無数の相がぼくの中で弾け飛んだ。
宇宙の風が
喪の空間を吹き抜けている。

(Steve Reich “Piano Phase”に)

1987.12.19

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

無題

一切の混乱を
ぼくが引き受けねばならないわけではない。

遊星の上の小さな虫たちの運命を
ぼくが決めているのでもない。

青い光の中の
透明な時間の中の
覆すことのできない証文を
神が書いたのでもない。

1987.9.8

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

野の廃墟で（モヘンジョ＝ダロにて）

膨大なレンガの道、
ほこりっぽい砂の道、
野ざらしにされた土器の破片。
かつて夕食の鍋が煮られた土間にぼくは立ち、
人々が行きかった道の上をぼくは歩いた。
かつて水が入れられた壷の破片を拾いあげ、
侵略者によって破壊された土塀に手を触れた。

いったいどの時間が
この廃虚の意味を具現するのに必要なのだろう？
そういう疑問が心を過ぎった。
だからぼくは描かれた文字を解読し、
刻まれた図形を判別しようと試みた。
けれど野の向こうの広大な大地が、
そしてそのまた向こうの大きな夕日が教えてくれた、
この時間が外へは流れ出していないのだということを。

ちっぽけな遊星の上の
ほんの一瞬の栄華を誇った都市の残骸、
冷たい宇宙の法則はそっぽを向いたままなのだ。
だからぼくは石を一つ積み上げた。
砂の上にぼくの足跡が残った。

（モヘンジョ＝ダロにて）

1986.12.27

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ぼくは狂気の中に生まれた

ぼくは狂気の中に生まれた。
ぼくは狂気の中に目覚めた。
だからぼくは
孤独に、焼けつく音の砂漠をさまよう。
歪んだ量子空間で、
錯綜した意識の森で、
ぼくは裸で神を呪い、
野蛮なリズムで踊り狂い、
ぼくにまとわりつく干からびた沈黙に
ぼくの記憶で抗うのだ。
絶えまない潮騒は
無の中の音符たちを掻き乱し、
漆黒の海は
ぼくの呼吸をいらだたせる。

夜の街の喧噪の中で
独りぼっちで俯いたぼく、
昼の楽しげな公園で
喘いで青空を仰いだぼく、
誰もいない雪の山で
電子のうねりを掻き回したぼく、
狭い閉じた部屋の中で
壁に向かって色彩を投げつけたぼく、
ああ、けれど、ぼくとは誰なんだ！
ぼくの意識の向こうに
ぼくでない無意識がある。
ぼくの存在の裏側に
呻いているぼくの記憶がへばり付いている。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

叫び出すがいい！
そして投げつけるがいい！
ぼくでない無の領域を目がけて。
天界から降り注ぐ光のシャワーを目がけて。
でも、その叫びは
きっと誰でもないものたちの中に霧散するだろう。
誰でもないものたち、
それはボサツか、
それとも神か、
それとも邪悪な鬼神なのか。

かつて遊星の上の虫たちと
血みどろの戦いを演じた鬼神たちの踊りが
今は一枚の絵の中に焼きついている。
けれどトキは安らいではいない。
トキは燃え盛っているのだ。
ぼくの相念は荒れた黄土の上で
隕石の爆撃の下で
途方もなく無となりうる音たちのはざまで
虚無に向かって吠えているのだ。
夢を見た天使は首を切られ、
美しかった鳥は
赤い炎で黒焦げになるだろう。
電磁波の荒れた波動に
ぼくの無意識の波がぶつかっている。
意味を擦り減らす戦いを
ぼくは挑んでいる。
何に対して、
けれど、ああ、何に対してなのか！
あなたは打ち壊した。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

あなたは打ち壊さずにはいないだろう。
あなたは打ち壊し続けるだろう。
ぼくは脅え、泣き、
悲しみと恐怖とで
裸の体を干し草の中に隠すだろう。
石たちだってそうだ。
風が荒れる夜空を見上げ、
顔を歪めておののいている。
動物たちだってこそこそ逃げていった。
ただひとり立っている枯れ木よ、
おまえだけは毅然として立っている。
でもおまえに対してだって、
あの者は容赦しない。
あの者は
仏頭を壊し、
寺院を破壊し、
聖典を灰にし、
空を赤く染め、
音を瓦礫の中に投げ込むだろう。
飢えといくさを
大地の上に蔓延させ、
恐ろしい疫災が世界の上に
脅威となって覆うのを
喜悦に満ちて見つめるのだ、
あの者は。
いや、それはあなたなのだ。
ぼくはあなたの望みを知っている。
あなたの望みはかなえられるだろう。
でもぼくは反抗せずにはいられない。
たとえぼくの音たちが

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ひとつ残らず打ち砕かれ、
ぼくの色たちがくすんだ灰色の石たちによって
打ち壊されたとしてもだ。
たとえ海の音が闇の中で聞き取れなくなっても
空虚が極限まで世界を支配しても、
ああ、たとえそうなっても、
ぼくは反抗をやめない。
ぼくはぼくを坩堝の中に放り込み、
その坩堝から立ちのぼる煙によって
あなたと戦うのだ。
ぼくは遊星の上のしらみ、
ぼくはただの石、
ぼくはちっぽけな何ものでもないものだ。
でもぼくの扉はたたかれている。

あなたはぼくを踏みしだいてゆくだろう。
でも扉をたたく者たちは
きっと誰かをたたき続ける。

1988.2.29

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

突破しきれないなにか

突破しきれないなにか！

けれど真夏の野では
虫たちが騒いでいる。

ぼくの中に凝り固まっている
ちっぽけなムゲン。

1987.12.5

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ガンガーのほとりで

ガンガーのほとりで
ぼくは足を洗った。
時間の破片が敷きつめられた宮殿の上を
サリーを纏った女性たちが歩きすぎた。
美しい、けれど、冷たい表情で。

なまぬるい日の光の下で
白い牛たちが寝そべっていた。
汚いなりで
無邪気な子供たちが走り回っていた。

誰も気づいていない。
でも世界はひび割れている。

1987.1.24

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

途方もない風の中に

途方もない風の中にぼくの沈黙はあるだろう。
光の届かない海の底にぼくの恐れはあるだろう。
閉じた輪の中に閉じこもり、
その中の愛に耽り、
その中の詩を偉大ならしめる
巨大な世界の維持者たる者よ。
けれどぼくは外へ、
人間が造りだした神の外へ、
歴史のうすの外へ、
歩み出たいのだ。

明日という日がないなら、
ぼくは大地に散りばめられた図形を集めて
賢者の坩堝で
ぐつぐつ煮てみたいと思うだろう。
遊星では空が真っ赤に燃え、
ぼくは重い足を引きずって、
砂っぽい風をなめるだろう。
あなたが拒絶したところのものが
ぼくの心に突き当たっている。

たった一人の反乱、
無力な者の、
消え入らんばかりの虚ろな反乱。
「ぼく」という名のアルファベットが
冷徹な宇宙の淵に干からびている。

1988.4.24（最新改訂：2015 年 7 月）

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

無題

ぼくが世界を傷つけたのか？
それとも君が世界に判決を下したのか？
ちっぽけな閉じた空間の中で
小さな虫たちが騒いでいる。

1987.9.7

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

死者を弔う

赤いもみじの並木を通って
死者を送った。
その真っ青な空の下では
子供たちがはしゃぎ回り
大人たちが卑しい笑いを浮かべていた。
けれど菩薩たちは
きれいに敷きつめられた玉砂利を踏みしだいて、
静謐の音を響かせて、
ゆっくりと歩き過ぎた。
ほおのこわばった死者たちの慟哭が
骨壷の上に響く。
弔いの歌を歌う者たちよ、
断崖のほとりで
声もなく無に飲み込まれてゆく者たちよ、
暗い天空をめざす闇の世界の存在者たちよ、
けれど、おまえたちの時代なのだ！
煌々と燃える紺碧の空の下で
世界の瓦解がゆっくりと進行していた。

1989.10.29

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

秋

天使たちが舞い降りる枯れ野、
跳びはねている小さな生き物たち、
色彩の砲弾にさらされて。

1987.9.17

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

道なき道を歩き

道なき道を歩き、
時間の干からびた大地を駆け、
重い雲のたなびく平原をさまよって、
ぼくがたどり着いた薄っぺらな追憶。
結実することのない求道者たちの夢が
世界を突破しようともがく干からびた夜。

けれど、異質の世界で砂と化した
あなたの宣告は無慈悲で重い。

くすんだ色が積み重なった
ぼくのキャンバスの上では
今日もまだ、石たちの未分化の衝動が
うずくまっている。
解き明かされることもなく。
ただ、うち震えて。

1990.8.2

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

無題

墓石の上で踊る
小さな生き物たち。
白っぽい時間が
雲の上を横切って流れている。

光の中では
不吉な予感が声を潜め、
かげろうの中では
のっぺらぼうの仏たちが起立を続けている。

けれど、その上には
巨大な空、
けれど、そのまた上には
言葉の希薄な冷え切った宇宙。

1987.10.14

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

翼のない天使は・Ⅱ

翼のない天使は絶対者を見上げる。
邪念を含んだ原初の光が錯綜した空間から噴出し、
燐光を放って茫洋たる大海に落ちるとき、
天使は呻いている神々の祭壇に
死に絶えた古代の文字を打ちつけ続ける。

名のない天使は星からの使者を待ち受ける。
戦時下の青ざめたグワッシュが
実在の苦悩を鳴りどよめかせ、
危機に瀕した根源的なカリグラフィーが
非言語的なパルスによって断片と化すとき、
天使はおぞましいまでの銀河的宇宙の彼方に
創造と混沌の始原を探し求め続ける。

ぼくたちの年月は
曖昧さへの偏愛が渦巻く有限地平の
不可解な運動を剥ぎとることに費やされた。
巨大なる時間の高峰よ！
嘲笑されている賢者のヴィジョンよ！
でも、世界が静止した瞬間の連ねられた海へと回帰する日にも
天使たちが絶対者のもとへ帰りつくことはない。
そして、ぼくたちの道に天使たちのまなざしが
降り注がれることもない。

ただ天使たちが
存在が剥き出しになった宇宙の中で、
かすかな韻律を追い求めているだけだ。

1982.8.20（最新改訂 2019.3.27）

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

誰かがぼくの扉を叩いている

誰かがぼくの扉を叩いている。
今日も、そして明日も、
扉をたたく者たちの足音が
眠りの中に突き刺さっている。

扉をたたく者たち、それは
存在への噴出口を探し求める天使たちなのか、
カオスへと誘い出そうとする魔術師たちなのか、
血の匂いを嗅ぎ付ける死神たちなのか、
道を行くことを求める沙門たちなのか、

でも、ぼくをたたいているのは彼らではない！
彼らではないのだ。
なにものでもない者たち、
縹渺たる風の舞う断崖の上で踊り狂っている
なにものでもない者たち、
この荒れた領土で夢の破片を踏みしだく者たち、
無数の星屑が輝く夜に火を放つ者たちなのだ。
彼らがぼくの扉を叩くのだ。

ぼくの右手には擦り減った意味が握られ、
ぼくの足元では虚ろな歓喜が燃え尽きている。
さあ、神よ、
あなたはいったい何を望んでいるのか！
あなたのまなざしは何に向かって注がれているのか！

ぼくは言葉による祈りを捨てた。
ぼくは形のための儀式を捨てた。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

けれど彼らがたたくのだ！

・・・・・

途方もないあなたとの戦いを

きっと誰かが

望んでいる！

1988.2.21

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

さざ波のように音が

さざ波のように音が
天を駆けているはずの世界。
でもその世界の底の広漠たる大地では
生き物たちが地面にへばりつき、はいつくばっている。
ぼくは小さな空の下の砂地の上に貝殻を並べる。
赤い色や青い色の貝殻を。

寺院の内では敬虔な信者たちの声、
古い鉄柱には聖なる言葉の刻印。
でも街ではけたたましい騒音と
人々の声、わめき声、金切り声。
息絶えた生き物たちの呻き声が
いたるところで立ちのぼり、
忘却を尊ぶ精神が
道の上で薄笑いを浮かべている。

ぼくは呪文を唱えずにはいられない。
道の上に楔を打ち込まずにはいられない。
菩薩のほほえみが
空無の中に飛散してしまっている今日。
そして、天使たちの翼が
泥にまみれてしまっているこの大地で。

1988.1.14

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

夢を見ているトキの砂漠

夢を見ているトキの砂漠、
ボクという標的を通り過ぎるボサツたち。
世界はまだ壊れてはいない。
でも神々は死に絶えている。

1988.1.16

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

神々の山

涯てしない沈黙の向こうの
湖に浮かぶ朝もやの向こうの
青い空に聳える
神々の山。

白い雪の上で、
永遠の沈黙の上で、
神々の赤い輝きが
朗々たる笑いを発している。

下界では老人が船を漕ぎ、
ゆっくりと釣り糸を垂れている。
小鳥たちが木陰で、
新しいさえずりを始めている。

シヴァは踊りを止め、
剣を置いて、瞑想しているのだろう。
朗々たるトキの断片が
羅刹たちの遊星を歩きすぎた。

1988.1.16

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

はるけさの中の冷たい光

はるけさの中の冷たい光、
絶望の淵でぼくらは踊る。
天使たちに忘れられて。

1988.1.16

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

混乱の中の光る標的

混乱の中の光る標的、
ぼくらは孤独に空を描く。
あざ笑っている不気味な深淵。

1988.1.16

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

天使に

天使に
光の中の天使に
夢の中の天使に
地上のものたちの幾多の願いが集まる。

薄暗い森の苔むした大木のそばで
枯れた野の水辺の葦のほとりで
空の中から舞い降りた星たちが
無数の星たちが夢を見る。

でもその日、
神の手が新しい世界のフラスコを振り、
蒸留し、抽出し、
新しい反応の場を用意するかもしれない。

けれど、廃墟の寺院に忘れ去られた仏頭は
今も虚無に向かって微笑み続けている。
死に絶えた時間の中心で天使たちが祈りを止めても
描かれた図形は静かに小さな光を発している。

1983.8.3（最新改訂：2022.10.22）

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

けれどぼくなんて

けれどぼくなんてほんとにちっぽけな存在、
世界の中ではどうでもいい存在。

そのぼくが
たあいない戯れをひたむきに演じている。
こっけいなことだ。
ヴォルスの心がなにかしらわかる。
ヴォルスという名の意味がなにかしら心にしみ通ってくる。
・・・・・
・・・・・・・
空の上の青、
絶壁のふもとの日の明るさ、
夢への漂泊と
薄明かりの下の褐色の道、
微笑するブッダがいくらか不気味だ、
この遊星の表面では。

1987.12.5

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

神々の死に絶えた海

神々の死に絶えた海、
その浜辺で
砂のようにさらさらと落ちてゆく光の時間。
白い衣の天使たちが
そして何ものでもないものたちが
夢の形をゆっくりと還元している。

けれど耳を澄ますがいい！
かつて存在者たちの表面をうねり巡った
ゴーゴーという時間の流れが
不可解な世界の向こうから
聞こえてくるに違いない。
粘土でできたトルソたちの声が
記号たちで埋め尽くされた大地の上に
滲み出してくるに違いない。

でも誰もいない。
荒々しい闘争の声は
絶対者に突き当たって砕け、
原初の混沌への回帰が
蜃気楼の中でタブローとなって凝集している。

ぼくは海に向かって叫んだ。
ぼくは静まり返った大気に向かって叫んだ。
ぼくは空虚へと途方もなく開かれている
気高い宇宙に向かって叫んだ。
すると奇怪な捩れたフォルムが
均質なブルーの中で
二つに割れた。
絶対の日に。

1988.2.11（最新改訂：2016.6.28）

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

世界がぼくに用意してくれたものは

世界がぼくに用意してくれたものは、

この小さな住処、この小さな領土。

外には茫々と不安の海が。

この斜面でたった一つの石を手に入れる。

誰も助けてくれないけれど。

1987.11.23

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

神にではない

神に祈りを捧げるのではない。
天使になのだ。
優美な青い線を描く神にではない。
存在の表面でうごめく天使になのだ。

巨大な石の舟は
キャンバスの上を渡っている。
黒い狼は
テーブルの上を疾駆している。

けれど閃光の中の絶対者にではない。
地の涯てで記号と化した天使になのだ。
ぼくたちは夢を見ている。
空には星くずがあり、
遊星の上にはひからびた道がある。
どの斜面にも虫たちが住みつき、
どの祭壇にも錯綜した線が埋め込まれている。

けれど神に祈りを捧げるのではない。
つばさを持たない天使になのだ。
ぼくはゆっくりとこね回す、
天使たちが摘み取った数え切れないほどの夢の断片を。

1987.11.23

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

無題

過激な夜の海に降りてゆこう。
石たちが沈黙する広野へ旅をしよう。
ぼくは涯てしないもの、
囚われないものが好きだ。

神の手はこね回す。
でも狼たちは
風を浴び、夢が食い荒らされる
野の上を疾駆している。

1988.2.28

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

はるけさの中の石の標的

はるけさの中の石の標的。
解読できない古代の文字が
ぼくの平べったい心でしきりに疼く。

なにかがこの白っぽい空を駆けていった。
なにかがこの風に中に言葉を投げ入れた。

どの小道も黙りこくって眠っている。
けれど、上空では、
なにものでもない者たちの無数の手が
混乱した光を練り上げている。
石たちの新しい割れ目から噴出している
小さなつぶやき。

1987.11.23

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

トキの向こうへ

現在という虚ろなトキを越えて、
さざ波のように響く音の障壁を越えて、
ぼくの中のとらえきれない欲望を越えて、
あなたの中の無数の気まぐれを越えて、
人の知の領域を越えて、
非言語的な空間を越えて、
ホトケたちの冷たい表情が
石たちのよそよそしい沈黙をやり過ごしている。

昼の街の喧噪を越えて、
夜の庭の木立のみずみずしさを越えて、
月の不吉な光を越えて、
星座の清妙な音楽を越えて、
砕けることを知らない法輪の響きが
遠い砂漠の風の呻きの中に、
雪山の激しいブリザードの中に、
ゆっくりと還元されている。
そうだ！
世界に打ちおろされる神のハンマーを越えて、
天使たちのまなざしが今日も注がれているのだ。

だからぼくは
遊星の表面にしがみつき、
ひびの入った斜面にしがみつき、
空から落ちる星の滴にしがみつき、
歴史の無数の断点の中から、
創造の幻惑的なヴィジョンの中から、
あなたの意志を読みとろうとしているのだ。

でも絶対者の声は
曼陀羅の中にはないし、
荒野の巨石の中にもない！

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

古い賢者の文字の中にも、
占星術師の錯綜した図形の中にも、
典雅な数学記号の中にもない！
憤怒に満ちた寺院の彫像の中にも、
善を嘉する聖典の言葉の中にも、
茫洋たる海の中にも、
日の光のはるけさの中にも、
そうだ！
一切を創成した人間たちの奇怪な祝宴の中にもない！

だからぼくは見知らぬ街を黙って歩き、
とりとめのない物語をひとりひも解く。
堤防の破壊者たちの声を聞き、
道端の土偶に祈りを捧げ、
そうして
世界の外からの音のシャワーに耳を澄まし、
荒野の狼たちの声の中から、
転がり落ちる石たちの中から、
祭壇に群がる生き物たちの中から、
遊星の表面に埋もれた骨壷の中から、
凄まじい速度で溢れ出してくる響きを
無音の領域に刻印しようとしているのだ。

けれどすべての音は
迷路の塹壕の中で反響するだけだ！
・・・・・
・・・・・
・・・・・
神が世界を形づくる以前のトキを
ぼくはひそかに待ち続けている。

1988.1.14

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

たった一人の反乱

たった一人の反乱、
たった一人の誰でもない者の反乱。

ぼくは風化した石の上で、
小さな祈りを捧げた。
ぼくは宇宙の小さな風穴から
死者たちを見送った。
そして、ぼくは破れた経典の言葉を
意味もなく繰り返した。

たった一人の反乱、
たった一人の誰でもない者の反乱。

何者かの啓示が大空に投影され、
無限への道が光の結晶の中に舞う日、
ぼくは小さな雪道を一人で歩いた。
ぼくは無数の言葉を飲み、
石に刻印された
鳥たちの羽ばたきを仰ぎ見た。

道の途上で、
新しい響きが卵の中で鳴っている。
古い響きが閉じた世界の中で交錯している。
ぼくの足跡が焔に包まれ、
ぼくの大地に熱した風が吹き、
通り過ぎた人たちが、
通り過ぎた無数の人たちが
こわばった顔で一つの極点を見つめている。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

星の下で、
無数の星たちの下で、
演戯記号たちと踊る
たった一人の誰でもない者、
その誰でもない者の反乱、
巨大な宇宙の
灼熱する宇宙の
数百億年の時間の渦を巡らせる光のない宇宙の
たった一滴のしたたり落ちる滴を
ぼくは夢に見ている。
反乱、そして夢、
神の名をぼくは削った。
そしてぼくは石を削った。

1992.3.30

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ぼくの領土

荒れ果てた褐色の荒野に
ふてぶてしい大木、
山はみなはげ山で、
大きな岩が日の光に焦げついている。
それがぼくの領土、
ぼくの呼吸する大地なのだ。

かつては僧院があった。
賑わいもあった。
読経の声が敬虔で、
一者への帰依があった。
でも今は
砂埃の舞う平板な土壌に
汚いなりの子供が
ぽつんと牛を追いかけている。

犬たちは嘲りの笑いを浮かべ、
叡知の破片は硬い土に突きささったままだ。
神聖な像は風化してしまい、
空の色は生ぬるくなった。
そう、これがぼくの領土なのだ。
ぼくはこの領土で、この荒野のただ中で
瓦礫を集めて祭壇を築く。
かつて生きていた文字たちや
星や生き物たちを供え、
炎を灯して
知らない神に祈りを捧げる。
・・・・・

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

けれど狼たちの遠吠えと
鳥たちのけたたましい鳴き声が呼応するだけ。
ひび割れた遊星の一角で
この小さな領土で
ぼくはむなしく踊りを踊る。

だから、さあ神よ、新しい戦いを始めよう。
ぼくはこの領土に満足していない！
ぼくは錯乱と幻惑の渦巻く葬送の道に
カンダルヴァの光を刻印したいのだ。
ぼくは悪意に満ちたカーリーの踊りに
遠い宇宙の弔鐘を打ち鳴らしたいのだ。
だから、さあ、神よ、
呻いているぼくの祭壇に
あなたのハンマーを打ち降ろすがいい。

1988.1.21

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

反抗

とめどもない神との戦い。
人間をとらえ、
大地につなぎとめておこうとする神との戦い。
ぼくは絶壁のふもとで、
電子の高周波のうねりの中で、
光の干渉しあう空間の波立ちの中で、
神と戦う。

けれど、ぼくは声を聞く。
声を聞くのだ。
鈍い光を帯びた無気味な無意識の奥底にうずくまっている
殺伐とした冥土の原野を吹く風のような、
茫洋たる年月の上の調和のない波のうねりのような、
激しい、荒々しい、
いつ果てるともない声を
ぼくは聞くのだ。

たくさんの砕けた石があった。
惨たらしい戦争と
無数の殺戮と略奪があった。
悲鳴と喘ぎ声と呪いの歌が
遊星の上に渦を巻いていた。
どんな時間の破片にも
血の臭いがしみついている。

むせかえるような歴史の豊饒さよ、
限りない喪の領域よ、
物質の中から膨れあがってくるおぞましい恐怖よ、
無垢の笑いの根絶やしにされたはげ山の刑場よ、
これがあなたの望みだったのか！
これがあなたの創造した世界の結果だったのか！

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

でもきっとあなたは満足だろう。
あなたは孤独な行者のような心で
時代を達観した賢者のようなほほ笑みで
このフラスコの中の世界を
天使たちのそして石たちの喘ぎ声を
冷徹な科学者のようなまなざしで
見つめているのだろう。

でも、ぼくは聞きたい。
このような軋んだ音しか生み出さない瓦礫の山が
あなたの望みなのか？
ぼくは戦わずにはいられない。
訴えずにはいられない。

朝の霧の中で
星屑が輝く夜空の上で
干からびた荒野の境界で
ぼくはあなたと戦うだろう。
幾度ともなく切り立った波をぶつけ合い、
意志を擦り減らし、
互いの文字を戦わせるだろう。

ああ、夜の森の閉ざされた神話よ、
微生物たちの非人格的な陰謀よ、
打ち壊された文明よ、
傷つけられた精神よ、
蔑まれた人間たちの愛よ、
この遊星の上の一切の混乱、
口ごもった祈り、
血塗られた宗教、
歪められた悟り、
それらすべてがあなたの意志によっているのだ。

だからぼくは祈りの破片をさらに小さく砕き、
狂気と失意の荒野で

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

荒れ騒ぐ月に向かって呼び掛ける。
地底の魔王よ、
十億年の彼方の鬼神たちよ、
トキの断片を食い尽くす羅刹たちよ、
さあ、今こそやって来るがいい、
おまえたちの時代なのだ。
錯乱と幻惑の中で
根拠のないらんちき騒ぎをやっている
投げ捨てられた生き物たちの声を聞くがいい。
ぼくの領土の野ざらしにされた祭壇を見るがいい。
独裁者の闊歩する巨大な機構と
数字の支配する冷酷な電子回路を
おまえたちの炎で焼き尽くすがいい。

けれどあなたの扉は開かれない。
あなたは拒絶したままなのだ。
ああ、いらだちを含んだ瞬間的な創造力よ、
原初の光によって泡立たされた色彩のポリフォニーよ、
でも、あなただけではない。
あなたが拒絶しているだけではないのだ！

ぼくの道はいつも
何者かによって閉ざされている。
遊星の上の虫たちのように
ぼくははいつくばり、
狭い空間を跳びはねて生きている。
焼けつく砂と、
ひび割れた記憶回路と、
意識にとっては無に等しい沈黙。
光と電子のうねりが
ぼくの夢をがんじがらめにしている。

ああ、ぼくの年月は電磁波の絶えず変調する
空無の領域を歩くことに捧げられた。
ぼくの呪術はホトケを呼び出すことに費やされた。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

意味不明の氾濫する文字たち、
化石の中に隠されてしまった普遍性のヴィジョン。

ぼくはキャンバスを引き裂きたい野望をもっている。
過激な衝動がぼくの斜面を駆け下り、
稲妻のような閃光がぼくの住処をうち震えさせている。
ぼくの反抗の突き当たる空よ！
巨大な宇宙の墳墓よ！
破滅へと導く神よ！

きっとぼくは誰でもない者たちが
空虚の中から取り出してきた魔法陣を
砂の上に刻印するだろう。
きっとぼくは鬼神たちによって傷つけられた雪の領域に
ぼく自身の小さなつぶやきを投げ入れるだろう。
あなたは新しい場を用意するかもしれない。
けれどぼくだって
これまで無であった世界からの
新しい宇宙の風を
心の内に吹き抜けさせているのだ、
光が食い荒らされるこの宇宙の冬に。

1988.3.6

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

青ざめた鳥たち

そして傷ついた天使たちは
巨大な翼の下で羽を休め、
人々と神々が闊歩する
茫漠たる大地を見下ろしていた。
機械の音と調和する足取りを
麻薬のように求める虚ろな存在者たちが、
冥府に吹く風を浴びる哀れな生き物たちが、
一切の栄光を焼き尽くす荒野で
屈辱への道を歩いていた。

夜の街灯の下では
震える息を弾ませながら半裸の少女が踊り狂い、
奇怪な絵の描かれた分厚い壁の前では、
男たちが酒びんを振り回して天を呪っていた。
地下鉄ではすさんだ空気が
地上を目差して膨れ上がり、
図書館ではいにしえの時代への押え切れない郷愁が
巨大な醜悪さをさらけ出していた。

爆撃された都市よ、
その残骸の下に埋め尽くされた
無数の呻き声を形にしてみるがいい。
衣服をはぎ取られて殺された少女たちの悲鳴を
神への呪いの中に練り込んでみるがいい。
そうだ、
滅びた文明は今はただ粘土板の中に
その不思議な魔力を眠らせているだけなのだ。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

イシュタル門を誇った栄光のバビロンよ、
マルドゥクの威容を誇ったエサギラ神殿よ、
そして、王の中の王、
ナボポラッサルよ！
けれど、アタルの月に捧げられた
燔祭の煙はどの虚空に飛散してしまったのか。
コンピュータの、電子回路の、
神経質な時間パルスの下で、
邪悪な者たちの声は、
今なお巨大文明のすみからすみまで響き渡っている。
きらびやかな文明の至るところにある断点に、
かつての邪悪な者たちが今なお巣くっている。
そして神は人々を裸にして
死神エレシュギガルの前に引き出すし、
一夜にして世界を粘土に変える洪水は
やむことなく繰り返される。
けれど、アララトは次々に用意されずにはいない。
青ざめた鳥たちよ、
虐げられたこの石たちを
ぼくはいったいどの土地に置いたら良いのか。

1990.9.22

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ぼくの願いは人間でなくなること

ぼくは一匹のしらみでありたい。
円い月の下の孤独な遊星を這い回る
一匹のしらみでありたい。

そうすれば
何も考えることはない。
混乱もないし、悟りもない。
祈る必要もなければ、石碑を刻む必要もない。

びゅうびゅうと吹く乾燥した風が
ぼくを砂の向こうへ吹き飛ばすだろう。
時間がぼくを朽ち果てさせ、
ぼくの根拠を海へと押し流すだろう。

一匹のきりんを
ぼくは探し続けている。

1987.12.7

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

無題

哀れにも死んでいった芸術家たち。
彼らが自由になれたのはキャンバスの上でだけ、
閉ざされた空間の内でだけ。

現実の中に根ざす夢の美しさは
雨に濡れたレンガのようにそっけない。

崩れてゆくもの、
戯れの中に埋没するもの、
マイナスの世界、
一、
哀れな天使たちのような。

1985.9.22

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

縹渺たる風の中で

一つの声をぼくは聞いた。無数の声をぼくは聞いた。
この縹渺たる風の中で、この閉ざされた電子のうねりの中で、この言葉の無い三界の中で。
限りない冥土の原野には無数の虫たちが群がっていた。大地はゆっくりと宇宙開闢の歌を歌った。
インドラは神酒ソーマを痛飲し、名馬ハリの引く戦車に乗り、マルト神群を従えて、ダーサの城塞を粉砕した。
アグニは闇を除き、悪魔を滅ぼし、稲妻として中空に閃いた。
天空を彩る色彩豊かな星々がゴーゴーと夜空に音を立て始めた時代、石たちが遊星の表面から転がり始めた時代であった。
シヴァは神秘的な静寂の中に瞑想し、カイラーサ山の頂で世界の創造と破壊を踊った。虎の皮を腰にまとい、羅刹を退治し、神々に挑戦する阿修羅の三つの城塞を破壊した。
ヴィシュヌは温和と慈愛の神、善を嘉する神であった。妃ラクシュミーと共に永遠の光に満ちたヴァイクンタに住み、霊鳥ガルダに乗り、四本の手に武器を携えて、地・空・天を三歩で闊歩した。

けれど太初にはなにもなかったはずなのだ。波のない無限空間の中で、光が一定の法則に従って輪舞していたはずなのだ。ただ唯一者が闇に包まれて存在し、ひとり呼吸していたはずなのだ。
唯一者たる者の愚かなる意欲よ、タパスによって生まれ出た者の永劫の苦しみよ。茎から絞り取った神酒ソーマを祭火に投じ、世界の内側に渦巻くカオスに捧げるがいい。そして気高い宇宙の沈黙に向かって弔鐘を打ち鳴らすがいい。
そうだ、神々との戦いは遥か彼方の時代から始まっているのだ。ぼくは扉をたたく者たちの声を聞く。ぼくはガンガーの流れの中に渦巻く声を聞く。
存在の裏側の斜面で薄っぺらなトキの断片を砕いている者たちよ！
風の中の反乱を引き起こす無数の記号たちよ！
世界の浜辺で戯れている無垢の天使たちよ！
遊星の表面の骨壷の中からは多様性をもった現象世界が立ちのぼり、車輪によって粉砕された時間は宇宙の底に向かって落下し続けるだろう。
引き裂かれた図形たちの呻き声はどこに結晶したのか？
傷付けられた世界の壁の前で記号たちはどんな響きを発しているのか？

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

錆びついた鉄の塊は朝日の中で煌々と輝き、色褪せたビルディングは純白の雪の中に埋もれるだろう。

けれど凍り付いた時間の向こうに、青々と燃える金属色の炎の向こうに、ぼくの投げ捨てられた記憶があるのだ。

現在という虚ろなトキを越えて、さざ波のように響く音の障壁を越えて、占星術師の文字盤の向こうに、荒野の巨石の向こうに、ぼくの涯てしない反抗があるのだ。

遊星の上では鬼神たちと虫たちとの血みどろの戦いが飽くことなく繰り返されてきた。

カンダルヴァの歓喜は闇の中へ葬られた。シヴァの踊りは遊星の上の光を破壊した。ラクシュミーの歌は色褪せざるをえなかった。

けれど世界を創造したのは誰であったか。それは神であったか、それとも創世主であったか、世界を創造したのは「私」ではなかったのか！

ヤージニャヴァルキヤよ、汝はいったいどの断点から世界を切り裂き、どんな聖句によって時間を静止させたのか。アートマンはどの業を通ってブラフマンに達したのか。

宇宙はなんという深い霊性の風土の中に浸っていたことだろう。

聖典の叡知はなんという閃光を祭儀の上にきらめかせたことだろう。

けれどこの遊星は熟して熱に浮かされ、人々は軋みあって生きてきたのだ。

モヘンジョ・ダロが廃墟と化した日、どれほどの悲鳴が赤い空を焦がしたことだろう。

バカヴァットの聖句によってパンダヴァの勇者はクルクシェートラを血の海に変え、かつてクヴェーラ神と戦って、天空を自在にかける戦車を奪い取ったラーヴァナは鬼神ラーマによって葬り去られた。

多数の都市国家が起こり、自由思想が勃興し、森林が切り倒され、畑が潅漑された。東方の産物、西方の貨幣が流入した。

海を渡る恐れを知らぬ船乗りたち、灼熱の砂漠を何日も旅する商人たち、旱魃に収穫の望みを断たれて農民たち。

婆羅門は祭祀の中心として不動の地位を築き上げ、降雨・豊作を祈願し、病魔を払い、呪術によって万物を支配した。

そして弱肉強食の戦争が果てしなく続き、強力な専制君主国は武力で小国を併呑した。

かつて草原を疾駆した彼らの戦車がどれほどの虐殺とどれほどの略奪を欲しいままにしたか、それを一遍の詩の中で歌い上げることは並大抵のことではない。聖仙リシが霊感によって与えた光明は茫漠たる大地で干からびずにはいなかったのだ。

でも遊星の上のちっぽけなさざめきに十億年の彼方の宇宙に潜むあなたのまなざしは届きはしない。平らな時間の上に滴り落ちる響きはあまりにも不可解だった。

シッダルタよ、けれど世界の壁は突破されねばならなかったのだ。車輪を止める光が指し示されねばならなかったのだ。世界でないものの剥き出しの響きがびゅうびゅうと

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

吹き込んでこなくてはならなかったのだ。

光明は爛熟した呻き声をぐつぐつ煮込んだ坩堝の中でカピラヴァストゥに現れた。
それは人類の青春時代でもあった。東では孔子が、老子が、西ではソクラテスが、プラトンが、そして遊星の上の様々な表面で無数のソフィスト、諸氏、沙門がロゴスを、タオを、仁を、ニルヴァーナを、ダルマを、ブラフマンを求めた。人類が踏破への道を探った黎明の時代でもあった。
シャカ族の賢者は愛馬カンタカに乗って別れも告げずに家を出、森で苦行し、菩提樹の下でついに禅定に入った。
奇跡を透視した聖仙アシタよ、捨て去られた麗しきヤショダラよ、乳粥を差し出した愛しきスジャータよ、教えに耳を傾けたベナレスの行者よ、汝らは祝福されるがいい。
一方、マーラは楽器が天上で鳴り響き、神々の称賛の声が聞かれるとき、軍勢を整えてホトケを目掛けて進軍した。毒蛇を吐き、火を吹く山を転がし、闇の軍勢の鬨の声が三界に響き渡った。
けれど、ボサツの眉間から一条の光明が発し、マーラは敗北する夢を見たのだ。哀れなるマーラよ、けれど汝が負けたのはただホトケに対してだけであった。
ホトケは法の車輪を回転させ、無量の光を解き放った。多くの沙門が教えに帰依し、僧伽に帰依した。ブッダガヤが、シュラーヴァスティーが、ヴァイシャーリーが、クシナガラが光に包まれた。無明が打ち砕かれ、縁起が明らかにされ、輪廻が終滅させられた。
けれどゴータマに背を向けた沙門シッダルタよ、汝の道もまた正しかった。
一者への道は教えによっては極められなかった。自己の内に、自己の奥底に潜む声によって生み出されるものの内にのみ道はあった。
そして世界は相も変わらず喧噪と欲望に満ち溢れ、苦しみは炎となって大地を駆け巡った。聖と俗の戦いもまた繰り返された。
アレキサンダーはカイバル峠を越え、タキシラへ進んだ。若き天才の偉業はけれどはかなかった。
チャンドラグプタはギリシャ人を一掃し、ヒンドゥークシュを越え、バルチスタンに達した。
アショーカはカリンガで十万人を殺害し、巨大な統一を成し遂げた。けれど彼は仏教に帰依し、無数の石柱を打ち立て、法勅を刻ませた。野の中に横たわる岩には今なお彼の理想が結晶している。
サンチーで、サルナートで、ストゥーパが築かれた。ガンダーラで、マトゥラーで仏頭が刻まれ、寺院が作られた。広大な大地のいたるところに僧たちの帰依、一者への帰依があった。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

アジャンタの石窟では仏頭が何千年も瞑想を続けた。金色の鳥は永遠の中を飛び続けた。
タキシラではカニシカのもと仏教会議が開かれ、ペシャワールは商都として栄えた。
ブッダの声は北へ、東へと広がっていった。
東方の賢者らは天竺に憧れ、天山を越え、タクラマカンを越え、パミールを越えてやって来た。法顕が、玄奘がやって来た。
ナーランダでは何万という僧が学んだ。図書館には数千冊の写本が収まり、ホトケの教えのみならず、芸術、哲学、言語、医学が教えられた。どれほど溌剌とした学僧たちの議論が戦わされたことだろう。どれほど熱烈な読経の声が響き渡ったことだろう。

けれどその高揚した時代の声は廃墟の中に埋もれてしまった。
仏頭は石畳の上に転がり、壁画の鳥は洞窟の中に置き去りにされた。経典の教えは流砂の中に埋没し、悟りの清妙さは空無の中に飛散してしまった。
アジャンタでは無駄となった努力が化石と化していた。サンチーでは乾いたレンガの上を風がひゅうひゅう舞っていた。
サルナートでは塔の回りの菩提樹だけが朗らかだった。今なお五体倒地で礼拝するチベットの僧たち、敬虔な香の薫りが遥かなる時代の余韻をさざめかせるだけだった。
ブトカラでは今なお荒野のただ中に長大な時間がうずくまっていた。冷たい風の中の、薄曇りの空の下の、忘れ去られたブッダはどこを見てほほ笑んでいるのか、そして石たちはどんな沈黙で時間のうすを回していったのか。野の向こうの雪山に輝く夕暮れの微光を受けて、ぼくはトキの空虚を手で探るのだ。
そうだ！ブッダは五百年と言った。
けれどあれからもう五倍の年月が流れ過ぎたのだ。
ぼくたちの道は下り坂になり、古い神々が、インドラが、シヴァが、亡霊のように立ち現れては遊星の上の巨大な機構を支配している。カーリーは今なお髑髏の首飾りをして、いけにえを求めている。
そうだ。遊星の上にひしめきあう無数の喘ぎ声を聞くがいい。今なお殺戮と虐殺と女たちの悲鳴と子供たちの泣き声をいたるところで耳にすることができる。
人生の内に閉じ込められ、世界のフラスコの中で犠牲となった尊い生き物たちよ。
彼らにできることは祭壇の回りを跳びはねることだけ、干からびた文字を砂の上に並べることだけなのだ。
かつて僧院に響き渡った読経の声はどの空に霧散したのか。
かつて経典に刻まれた叡知はどの時間の中に燃え尽きたのか。
ぼくはインドの大地を踏み締め、人々のひしめく喧噪の街を歩き、死に絶えた神々に祈りを捧げ、世界の壁に描かれた光の文字を読んだ。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ガンガーでの沐浴に一生の願いを託し、リンガの回りに麗しい花束を投げ掛ける脅えた生き物たちよ。
行者たちの虚ろなまなざしをぼくは見過ごし、街の商人たちの間をすりぬけた。混乱の国、そして色彩の豊かな国。
かつて異国の軍隊がこの大地を踏みにじり、かつて一人の裸の聖者が非暴力で独立を勝ち取った。
世界に喚き散らした詩人はガンガーのほとりで死体を焼いた。

ちっぽけな、ちっぽけな、ちっぽけな石たちの声よ、ダルマの消えた海で怪鳥ガルダが虚空の中を飛び回っている。渦巻く時間がぼくの相念を泡立たせている。歴史の苦味が大地に染み込んでいるのだ。
ああ、アシュバッタの木は永遠であった。人々がよりどころとするプラーナの胎動によって生まれ出た世界よ。鏡の中に映る像のように自己の中に見られる巨大な歴史の渦よ。
けれどトキは完結してはいないのだ！
そして遊星の上での生起はただ引き起こされたというだけなのだ！
エメラルド色の海の底に沈澱した石たちの声、星座の隙間で光を放つ鬼神たちの踊り、かつてフラスコを振って神が与えた法則を今はさそりたちや蛇たちが食い荒らしている。大地の叫びが荒れた野に亀裂を走らせ、跳びはねている生き物たちは水辺の泥の中から空を仰いでいるのだ。
朗々たる日の光の下のモヘンジョ・ダロの廃墟で、野のただ中のブトカラで、シルカップで、ビール・マウントで、アジャンタで、タクティ・バイで、ぼくは知らない神に祈りを捧げ、古びた聖典の文字たちを拾いあげた。
けれど存在の深奥では今なお未知なるものが無気味に光り続けている。世界の壁は遊星の表面にへばり付いているだけのぼくたちにはあまりにも重々しい。
かつて無の領域に意識の波動を投げ入れた何ものでもないものたちよ、おまえたちの狂気が生み出した荒れ騒ぐ宇宙に、ゴーゴーという存在の断片の流れの中に、いけにえとなった者たちの墓標を打ち立てるがいい、世界の終わりの日には、きっと。

1988.3.18

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

喪の領域に・Ⅱ

人々の行き交う褐色の道の上を
赤い花、黄色い花のうち捨てられた寺院の上を
ゆっくりと天使たちが歩き過ぎた。

星たちは巨大な呻きとともに
数十億年の彼方の音の記憶を照らし出し、
反逆する虫たちは
宇宙の中心で騒いでいた。

小さな遊星の上の
無意識だけが光であるような世界。
緩やかに存在を泡立たせる
荒涼たる風の吹き荒れる小さな世界。

その世界の中で、ぼくはひとつの脅威にさらされていた。
ぼくの祈りは
血の匂いのしみついたねばねばした泥土の上で
宇宙的混沌の中に還元され、
赤ら顔の預言者たちが
残酷な光景の中で
毒々しく息づいていた。
そうだ！
ニューヨークの、ロンドンの、東京の、
ネオンに輝く巨大な喧噪の下で
ぼくの呻きは
冷たい夜空に突き当たる。
そして、天使たちがいつの日か
沈黙の雪に輝く

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

エンパイヤ・ステート・ビルに降り立って、
積み上げられたコンクリートの朗々たる笑いに
心静かに耳を傾けることがあるかもしれない。
けれど、ダルマは
時間の中に根拠をもたないダルマは
怪鳥ガルダの飛び回る
巨大な灰色の海の中に
あてどもなく飛散してしまっている。

だから、ぼくは太古の音の響きわたる銀河的な宇宙を
ひとつ、またひとつと、ゆっくり砕いた。
すると巨大なエナジーが
現実を繰り返すにとどまらない
魔術的な三界の中心を貫き、
沈黙の向こうの永劫の光が
超越的なチェス盤の上を疾駆した。

そうだ、
インドラの矢は世界そのものを破壊せずにはいないだろう。
この世界の狂気は
シヴァによって打ち砕かれずにはいないだろう。
ぼくは祈りを捨て、
神々の粘土板を捨て、
数十億光年の巨大な宇宙の中の
ほんのちっぽけな遊星の上の
小さな波のざわめきのそばで
ゆっくりと砂の上に記号を描いた。
ぼくの声を小さな紙の上に結晶させ、
ぼくの夢を薄っぺらな大地の上に埋め込むために。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

そしてぼくは異界と交信を通して、
世界の存在するわけを問い掛けた。
すると突然、
非存在がふてぶてしく横たわる世界の無気味さが
巨大な魔術を終わりにさせた。
ぼくはゆっくりほほ笑んで
共演者のシッダルタと共に
ガラス玉演戯の幕を引き、
ぼくの存在からゆっくり降り立った。
世界が粘土に変わっていた。

1988.11.21

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.